宮城縣利府村春日燒瓦場大澤瓦窯址研究調査報告

東北帝國大學法文學部奥羽史料調査部
研究報告　第一

内藤政恒著

東北帝大法文學部に於ける輝かしい近業の一つとして我が學界に贈られたるこの書を紹介することは、吾人をして、また同大學が國史學の講座をもつに至つたとき以來の歴史的回顧をなさしむべき機會を與へたことにもなるのである。本書紹介の任にあたるものは、何よりもこの義務を先にしなければならぬ。

大正十二年十二月古田良一氏、當時助教授として赴任せらるゝや、爰に始めてその講義の開始をみた東北帝大國史學科は、やがて喜田貞吉博士を講師をして招聘することにより、特殊なる使命を研究の上に掲ぐることゝなつた。卽ち「奥羽地方の歴史研究」なるこの大學の國史學科のみが負ふべき獨自の課題は喜田博士の首唱によつて具體化され、古田教授の外に故中村善太郎教授を交へた三名の共同研究たる形を以て、こゝに同大學國史研究室を本據とする「奥羽史料の調査研究」は開始せられたのである。

これ「太古より現代に亙り主として奥羽地方に關する史料を調査整理し、其の沿革變遷の蹟を明にするにある」を標傍した奥羽史料調査部の誕生であつて、その第一期事業に於ては殊に喜田博士の活動に俟つところ大きく、奥羽地方の石器時代遺物遺跡に關する資料蒐集並びに調査、月刊雜誌「東北文化研究」の發行、「日本石器時代植物性遺物圖錄」の刊行等はその主なる事業であつた。其後調査部の仕事は喜田博士に代つて古田教授が主宰さるゝに至り、自ら事業は第二期の段階に入つた。よつて教授は自ら奥羽海運史の研究に從事せられる一方、國史研究室の職員及大學院學生を指導して東北地方の文獻的考古學的調査研究を進められ來つたが今やその最初の成果をこの瓦窯址調査報告に見ることゝなつたのである。本瓦窯址の發掘は昭和十一年六月より同年十月に及び、前後十數回に亙つて同大學法文學部講師伊東信雄、助手山本桝藏囑託内藤政恒三氏の共同作業として行はれたが、最も力を致すところあつた内藤氏を以て之が著者とされた。以上古田教授の序文により、本書が大いなる使命の下になされつゝある研究事業の一部分たることを了解しつゝ内容の紹介へとすゝみたい。論述はすべて八章に分れ之に配するに四十に近い圖版と三十五の挿圖を以てしてある。第一章序説に於てはこの遺跡が從來文獻に見えたるところとして宮城縣史蹟名勝天然紀念物や宮城郡誌をあげ、それが極めて表面的な記述に終つてあること、及び大正十年における柴田常惠、小此木忠七郎兩氏の調査、大正十一年における上田時氏の調査による窯址の發見がこの調査研究の企圖さるゝ動機をなしたことをのべてある。

さて瓦窯址が位置する利府村大字春日とは、仙臺市を去る東北約十二粁、名高い多賀城址よりは北方約五粁米の地點にあたり、東北本線南沿ひの利府・松島兩驛の中間に存する人煙稀な一部落であつて海拔一〇〇米内外の緩傾斜をなせる丘陵地帶である。遺

址はこの地帶にあつて略々東西に帶狀をなして入りこめる水田に南面し、幾らかの傾斜をもつ狹少な雜草地に營まれたもので土質またこの瓦窯が築かれるにふさはしく、極めて優良な砂質粘土層をなしてゐる。瓦窯はすべて五ヶ所に見出されるが、何れもその下端大床部は水田に接し、それより約七米の長さと一米の幅（中央部にて）を以て、上端煙口部に緩く傾斜緩漫なる登窯で、之がこの雜草地二十乃至二十五米の區間にわたつて東西に並列し、之に便宜東のものから第一、第二、第三、第六、第四の名稱が附せられたものである。さらに之に附隨して燒瓦作業に關係ある遺跡地が五ヶ所發掘されてをりその一つはこの瓦窯址群より西南五十餘米離れた地點にあるが、他は第四號瓦窯の西方に接するもの、第四號第六號西窯中間の上部に存在するもの、第六號窯上半部の東側に接するもの、第一號第二號兩窯の上部に接するもの等比較的相近く、之等は夫々第七、第五、第九、第十、第八の地點と名付けられた。まづ上記せる五つの瓦窯をみるにその規模構造は何れも近似し、その一つに於て明かにされた事實は他に於ても同樣類推してほゞ誤りなき好都合の狀態にある。かやうな點で、最もよく舊態を保存せる第四號窯の記述は、また著者の大いに力を入れた點であること改めていふを要しない。いまその評細なる記述の紹介は許されないが興味深き個所を一二とり出すならば二重床と稱せられるもの及び天井部復元の研究であらう。本窯その底部は最上端煙口部を去る約五米下方附近から約二十度の勾配を以て急傾斜し、こゝから約一米下方に於て略々水平となつてをり、最も强烈な火氣に遭つたこの急傾斜面の部分の底には之また火氣に極めて硬化した堆積物があり眞の底部を蔽ひ、一見底部の如く見えるのでかゝる名稱がつけられたらしいが、大體之は燒瓦作業によつてそのたび毎に生じた灰が漸次底面に堆積し、强い火氣の爲に凝固したと考へられてゐる。この堆積物によつてその下端から窯の側壁部に林立せる牝瓦群の中央部に至る間を火床部と斷定され、それから窯口までを火焚口と認められたのである。次に天井部は五つの瓦窯何れも崩壞して原狀を察知し難き爲、こゝに第四號瓦窯の狀態を準據としてその復元が企圖された。特にその上端壁外側から約一・七〇米距つた箇所の窯の斷面に於ては、その底面から厚さ九糎の濃鼠色なる燒土層があり、その上を赤褐色土に覆はれてゐるが、更にその上に、中央部で左右から傾斜して相交叉するV字形の濃鼠色土がある。このV字形層は、各邊の長さ約三十糎厚さ約十糎あり、之卽ち天井部の崩落狀態を示すと推定されたものであつて、天井部が中央部より折れて落ち込んだ左右兩側壁により、このV字層をなしたことが明かにされた。之により復元された天井の高さは底面より八十五糎となるが、窯の上部と下部で幅員增減するに應じて高さの割合も變ずることは云ふ迄もない。轉じて瓦窯址發見の遺物をみるに、大部分は古瓦類であつて、他には第十號地點より發見された須惠器の破片九個あるにすぎない。瓦も多くは牝瓦牡瓦の類で、鐙瓦宇瓦（第八號地點發掘）ともに唯一種しか見出されないが、その瓦當面から推して大體奈良朝末平安初期の所產とみられるので本瓦窯年代想定上、唯一の

資料としてこの文様瓦は極めて貴重なるものとなつてゐる。なほ鐙瓦の瓦當面には、何れも珠文帶中の珠文數個に縱の短かき線があるところから、鐙瓦の文様は一個の氾になつたものであり、而もその原型作製にあたり、それが木質なる爲、木目による割目を生じてこの縱線があらはれたとする。瓦自體にかゝる精緻な考察を行ふ一方、仙臺近郊に於ける瓦窯址出土の古瓦との比較も注意されてをり、鐙瓦の如き、多賀城・高崎廢寺・陸奥國分寺・同尼寺及び燕澤の諸遺址出土のものは、この大澤瓦窯址出土のそれと同一笵から作製されたと見られるに反し、宇瓦には僅か多賀城と共通なものがあるに過ぎない。而してこの地方に於ける上代造瓦の中心地は遺物出土の狀態よりして仙臺市の北郊原町小田原であつたと思はれるのであり、大澤瓦窯は多賀城に使用の必要から、謂はゞ小田原瓦窯の出張所の如き形を以て設けられるに至つたのであらうとされた。

最後に注意すべきは瓦の成分に關する化學的考察をされた點である。本遺蹟より採集された古瓦は大體濃鼠色にして堅緻なものと、黃灰色乃至赤褐色にして軟質のものと二種あり、化學分析の結果、兩者の色調・硬度に關する相違は畢竟窯內に於ける火熱の强弱と空氣の供給される分量の多少、並に之によつて生ずる鐵分の化學變化に基くものであつて、元來は同一成分のものであることが知られた。從來軟質瓦の發見を以て火災に遭へるものと解し從つてその建築も燒失せりと斷定せる傾向にあつた學說に對し、右の考察は實に重要なる反省を促したものであると云はねばならぬ。以上紹介し來つた諸研究は

第二章　大澤瓦窯遺址の位置とその地形狀態
第三章　大澤瓦窯址發掘調査の經過
第四章　大澤瓦窯の遺蹟
第五章　大澤瓦窯址發見の遺物
第六章　仙臺市近郊に於ける瓦窯址の概觀
第七章　大澤瓦窯址發見古瓦と仙臺市近郊發見古瓦との比較考察
第八章　結論

のうちから特に我々の注目すべき點につきその一二を拾つて記述したに止まるが、前後を通じ記事すこぶる詳細にわたり、第三章の如きは發掘の始めより終了するまで、日誌的にその調査狀態を叙述してをり、發掘によつて刻々に變化する瓦窯址現場の形貌を逐一撮影して挿圖や圖版に入れられた周到さも本書の爲には誠によろこばしく思はれる。たゞ記事の詳細は、時に重複冗長の嫌がないではないが、之は特に缺點として取上ぐべき程のものではない。むしろ吾人はかうした精密な調査研究が世に出づるまでの東北帝大國史研究室の方々の並々ならぬ努力に對し、深甚なる敬意を表し、さらに進んで之が徹底的調査研究を遂げられんことを冀ふともに、今後に於ける奥羽史料調査部の活動とその研究報告の續刊を大いに期待するものである。（四六倍判本文八三頁、圖版三八葉、昭和十四年一月發行、非賣品）（村山修一）